

## 生の完成としての出家

— 御法の巻・幻の巻私見

久保重

(一)

源氏物語の御法の巻は紫の上と源氏とがそれぞれに出家の志を抱きながら本意を果さずにいるところから書き始められている。紫の上は源氏の許しを得られないために、源氏は病久しき紫の上の身が気がかりなため世を捨てられないのである。本文には次の通りに書かれている。

「紫の上いたうわづらひ給ひし御心地の後、いとあつしくなり給ひて、そこはかとなくなやみ渡り給ふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月かさなれば、たのもしげなく、いとどあえかになりまさり給へるを、院の思ほし歎くこと限なし。しばしにても後れ聞え給はむことをば、いみじかるべく思し、みづから御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたきほだしだに

交らぬ御身なれば、あながちにかけてどめまほしき、御命とも思されぬを、年頃の御契かけ離れ、思ひ歎かせ奉らむ事のみぞ、人知れぬ御心の中にも、ものあはれに思されける。後の世の爲にと、尊き事どもを多くせさせ給ひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命の程は、行を紛なくと、たゆみなく思し宣へど、さらにゆるし聞え給はず。さるはわが御心にも、然思しそめたる筋なれば、かくねんごろに思ひ給へるついでに催されて、同じ道にも入りなむと思せど、一度家を出で給ひなば、仮にもこの世を顧むとは思し掟でず。後の世には、同じ蓮の座をも分けむと、契り交し聞え給ひて、頼をかけ給ふ御中なれど、ここながらつとめ給はむ程は、同じ山なりとも峯を隔てて、あひ見奉らぬ住処に、かけ離れなむ事をのみ思し設けたるに、かくいとたのもしげなきさまに、なやみあつし給へば、いと心苦しき御有様を、今はと往き離れむき

ざみには棄て難く、なかなか山水の住処濁りぬべく、思しとどこほる程に、ただうちあさへたる、思のままの道心起す人々には、こよなう後れ給ひぬべかめり。御ゆるしなきて、心ひとつに思し立たむも、さまあしく本意なきやうなれば、この事によりてぞ、女君はうらめしく思ひ聞え給ひける。わが御身をも罪軽かるまじきにや、と、うしろめたく思されける。(日本古典全書「源氏物語」に拠る。以下の引用本文もみな同書に拠る。)

紫の上の出家の願いは、右の本文に書かれている通り、わが身はこの世に飽かぬことなき身の上と満足した上で、現世の命のある間に、余事に紛れることなく勤行三昧の生活に日を送りたいと望むところに発している点に特色が見られる。

この物語の中で、これまでに出家した女性達の発心の直接の動機を見ると次の通りである。

空 蟬 夫の死後、継子紀伊守の懸想から逃れるため。

(関屋)

藤壺の中宮 桐壺の院の崩後、源氏の執拗な求愛からのがれ、皇子(後に冷泉帝)の地位の安泰を確保するため。(賢木)

王命 婦 入道した主君に奉仕するため(賢木)  
(藤壺の女房)

明石の尼君 記事なし。夫明石の入道が出家した際に、共に出家したか。(須磨の巻で既に尼として登場)

六条御息所 病篤きため。出家の七八日後に死去。(薄櫻)  
大 夫致仕大臣の死(薄雲)の後、老後の出家。(記  
(夕霧の外祖母) 事なし。少女の巻では既に尼になっている。)

臘月夜尚侍 朱雀院の出家の際は朱雀院が制止したために思い止まるが(若菜上)、遂に出家する。(若菜下)

女 三 宮 柏木の事件の後、源氏が自分と若君(薫)に冷淡なのを悲しく思つて出家する。(柏木)

女三宮の乳母と 入道した女三宮に弟子となって奉仕するため  
女房達十余人 (鈴虫)

動機だけの問題にすると、右の例の示すところは、或いは保身のため、或いは出家した主君に仕えるため、出家した夫につくすため、或いは重病、人生の挫折、老齡等の事由による出家であった。紫の上の動機は、それとは全く性質を異にしている。人間として生きていくこの現世の生を捧げて仏に奉仕したいという内面的な欲求が動機である。これは源氏物語の作者が紫の上のために創作した特殊の設定であつて、女主人公の生の理想的な終結を描き出すために、作者がここで新しい思考を打ち出したのだと私は思うのである。源氏は紫の上の出家の願いを聴き容れようとしなない。そこに、「有夫の女性の出離」という課題を作者が併せて提出したのだと私は思われる。紫の上は、夫が怨めしく、仏に納受されないわが身の、宿世の罪障を悲しくも不安にも思う。然し流石に自分が出家した後の源氏の寂寥を思うと夫の気持がしみじみとわかる気がする。更にまた、夫の不許可を押し切つて無理な出家をすることも女の身

にあるまじき不様だと思ふ。

紫の上の出離の志に触れた記述を点検すると次の通りである。

(1) 最初の記事は若菜下に見える。源氏四十六才の年、冷泉帝が今上に譲位され、紫の上の養女明石の女御所生の、一の宮が皇太子に立つた。もはや此の世に何一つ不足のないのにつけて、紫の上は出家したいと思ふ。源氏と紫の上との夫婦仲は飽かぬことなく睦じ

い。  
「年月経るままに、御中いとうるはしく睡び聞え交し給ひて、いささか飽かぬ事なく、隔も見え給はぬものから、今は、かうおほぞうのすまひならで、のどやかにおこなひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齡にもなりにけり。さりぬべき様に思しゆるしてよと、まめやかに聞え給ふ折々あるを、あるまじくつらき御事なり。みづから深き本意あることなれど、とまりてさうざうしく覚え給ひ、ある世にははらむ御有様の、うしろめたさによりこそながらふれ。つひにその事とげなむ後に、ともかくも思しなれなどのみ、さまざま聞え給ふ。」

紫の上は「人生に区切りをつけてもよい年齢になった」と思つたのである。幸福すぎる満ち足りた生活に畏れを感じているのではない。余生を以つて仏に奉仕したいのである。その発心の動機には何ら暗い陰は蔵されていない。これは、御法の巻の冒頭に見るものと同じ満足感に発する考え方である。この時の紫の上は健康にさえ恵まれていた。制止する源氏の言葉は矛盾しているが、紫の上に対す

る彼の愛執の告白だと解釈すれば理解出来なくはない。紫の上は、夫の承諾を得られないことはわかったが、素志を棄てる事が出来ない。

(2) 「わが身はただ一所の御もてなしに、人にはおとらねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、然らぬ世を見はてぬ前に、心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつつまれて、はかばかしくも聞え給はず。(若菜下)

女三宮は兄弟の配慮によって二品に昇叙され、明石の御方は、春宮の母女御の、生母として声望が高まって行くのを見るにつけ、紫の上の出家の望みは強くなる。紫の上が彼女達の榮達を羨しがる記述はどこにもないから、その心の動きは保身のための配慮というよりは、六条院内の最高女性の地位に甘えてはならないという自省と見られる。それよりも「さかしがる様に夫源氏に思われたくない」という紫の上の心遣いに注目したい。この心づかいが彼女に出家を強行させない。またこの心づかいが持続されて、御法の巻の紫の上を美しい上にも美しい病床の佳人として特色づけるのである。

(3) 源氏四十七才の年の正月、紫の上は三十七才、重い厄年にさしかかる。紫の上には何か予感があったのかも知れないが、源氏は依然その出離の願いを聴きいれない。

「まめやかに、いと行先少き心地するを、今年もかく知らず願にて過すは、いとうしろめたくこそ。さきざきも聞ゆる事、いかで御ゆるしあらばと聞え給ふ。それはしもあるまじき事になむ。さて

かけ離れ給ひなむ世に残りては、何のかひかあらむ。ただかく何となく過ぐる年月なれど、明暮のへだてなきうれしきのみこそ、ますことなく覚ゆれ。なほ思ふさま異なる心の程を、見はて給へとのみ聞え給ふを……」(若菜下)

その翌日の夜中に発病。以来、紫の上はいよいよ出家を切望する。

(4) 「いささか物思し分く隙には、聞ゆる事をさも心憂くとのみうらみ聞え給へど、限ありて別ればはて給はむよりも、目の前にわが心とやつしして給はむ御有様を見ては、さらに片時堪ふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ、昔より、自らぞかかる本意深きを、とまりてさうごうしく思されむ心苦しさに、ひかれつつ過すを、さかさまにうち棄て給はむと思すとのみ、惜しみ聞え給ふに、げにいと頼み難げに弱りつつ、限のさまに見え給ふ折々多かるを、いかさまにせむと思し感ひつつ……」(若菜下)

重態が続いても、源氏は紫の上への愛の余りに、その出家の願に承諾を与え得ない。

(5) その年の四月中旬、紫の上が一時息絶え、源氏の大願と加持の験によつて辛うじて蘇生した際に、ついに在俗のまま五戒を受けるところだけを許す。

「御髪おろしてむ、と切に思したれば、忌むことの力もやとて、御頂しるしばかり剪みて、五戒ばかり受けさせ奉り給ふ。御戒の師、忌むことのすぐれたる由、仏に申すにも、あはれに尊きこと交りて、人わるく御かたわらに添ひ居て、涙おし拭ひ給ひつつ、仏を諸心に念じ聞え給ふさま、世にかしこくおはする人も、いとかく御

心感ふ事にあたりては、えしづめ給はぬわがなりけり。いかなるわざをして、これを救ひ、かけとどめ奉らむとのみ、夜昼思し歎くに、はればれしきまで、御顔もすこし面瘦せ給ひにたり。」(若菜下)

ひたすらに出家を願う紫の上の沈静した心とは対蹠的な源氏の激しい愛執の情念が見られる。源氏にあつては紫の上の為の祈も加持も読経も、五戒受戒もみな現世の彼女の為に仏が加護を垂れることを熱望するあまりの手段なのであつて、三宝帰依の誠心を捧げる意味での信仰は今心の感の状態で於いて望むべくもない。むしろ、現世に飽かぬことなき大貴族の彼は、能うべくは仏にも命令を下したい気持なのである。作者はその様な源氏を咎めてはいない。

源氏はひとり紫の上の出家を許さないのである。秋好む中宮が出家の意志を漏らしたのに対して

「定めなき世と云ひながらも、さしていとほしき事なき人の、さわやかに背き離るるも有難う、心やすかるべき程につけてだに、おのづから思ひかかづらふはだしのみ侍るを、なかかその人真似にきほふ御道心は、かへりてはひがひがしう、おしはかり聞えさする人もこそ侍れ。かけてもいとあるまじき御事になむ」(鈴虫)

と諫める。言ひ廻しには敬意を損じない様に十分に留意しているが、ずい分強い言い方で制止している。中宮は、母六条御息所の死執を晴らす為に出家したいのだと打ちあける。源氏は、御息所の死霊が、紫の上を危くとり殺そうとし(若菜下)、次いで女三宮を出家させてしまうのを体験している(柏木)のだが、中宮の出家を容認せず、孝養の道は別にあると教える。中宮はこの諫めにしたがう。

「何事も御心やれる有様ながら、ただかの御息所の御事をおぼしやりつつ、行の御心すすみにたるを、人のゆるし聞え給ふまじきことなれば、功德のことを、たてておぼし営み、いとど心深う、世の中をおぼし取れるさまになりまさり給ふ。」(鈴虫)

聡明な中宮は出家を思い止まり、亡母の苦患を救う為に功德を積み、自身も次第に宗教的さとりを深めて行く。

(6) 上に掲げた御法の巻の巻頭の記述。(12頁参照)

「みづからの御心地には、(a)この世に飽かぬことなく、(b)うしろめたきほだしに交らぬ御身なれば、(c)あながちにかげとどめまほしき御命ともおぼされぬを、(d)年頃の御契かけ離れ、思ひ歎かせ奉らむ事のみぞ、人知れぬ御心の中にも、ものあはれに思されける。(e)後の世の為にと、尊き事どもを多くせさせ給ひつつ、(f)いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命の程は、行を紛れなくと、たゆみなく思し宣へど、さらにゆるし聞え給はず。」

(a)は(1)で見たのと同じ心境である。読者は紫の上自身は我が身はこの世に飽かぬことなしと観じ、それが発心の動機となった。(b)は実子がないことを指すのであろう。(c)は紫の上が死期の遠からぬを予感し、生命への執着をすでに絶つていること(d)は自分の死後源氏が悲歎してくれることを予想し、物あはれに思つていことが述べられている。(e)と(f)とは最も絶ち難いとされている生の執着と恩愛の執着を脱して、紫の上がすでに分離者と等しいすつきりとした心境にあることを示すものである。この二つの執着は、当人が強い精神力

をふるつて敢えて断つことによつてのみ、断ち切れるものである。(a)の満足感も、これと同様の精神力の所産と見られる。紫の上は、出家の最も困難な最も大切な部分を、人知れず成し遂げている。残るのは夫の許可を得てさまを变える(f)の部分である。御法の巻はこの時点から書き始められる。

源氏はその厳肅な出家観と紫の上に注ぐ愛とにしばられて、自身も出家し得ず、紫の上の出家にも同意を与え得ない。源氏の許可が得られないことが決定的であれば、紫の上は秋好む中宮が辿つたのと同じような道を歩むほかはない。(e)に言う様な功德のわざを一層心を入れて営む。その催しの一つが、——それが最後の法要になるのだが、春三月、二条院で催された法華經千部供養の御八講である。春が去り夏も過ぎ秋を迎え、紫の上は日増しにいとど心深く世の中を觀じ取りつつ、さかしら立ちたるさまにならぬ様に、死を迎える準備をする。別れを告げるべき人には挨拶をし、あとに残る女房達の身のふり方を考えてやり、庭の紅梅と桜とを幼い匂宮に贈る。

(7) 紫の上は素志を遂げずに逝つた。

「院はまして思ししづめむ方なければ、大将の君近く参り給へるを、御几帳のもとに呼び寄せ奉り給ひて、かく今は限のさまなめるを、年頃の本意ありて思ひつる事、かかるきさまに、その思たがへて止みなむがいとほしきを、御加持に付ふ大徳たち、読經の僧なども、皆声やめて出でぬなるを、さりととも、立ちとまりてものすべきもあらむ。この世には空しき心地するを、仏の御しるし、今はかの暗き道のとぶらひにだに頼み申すべきを、頭おろすべき由もの

し給へ。さるべき僧たれかとまりたるなど宜ふ御気色、心強く思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにのみじく、堪へかね、御涙のとまらぬを、ことわりに悲しく見奉り給ふ。」(御法)

源氏はせめて死後の落飾を許そうとするが夕霧に制止される。ひそかな恋心を抱きつづけて来た夕霧は、美しい紫の上を一髪たりとも損じたくなかつたのであろうが、「出家は一日一夜のそれであっても仏に功德を積むことになるが、死後の出家は意義がない。」と云う。次の夕霧の言葉は出家は本人が行うものだとする作者の識見の見事な表現である。

「まことにいふかひなくなり果てさせ給ひて、後の御髪ばかりをやつさせ給ひても、ことなるかの世の御光ともならせ給はざらむものから、目の前の悲しびのみまさるやうにて、いかが侍るべからむ」(御法)

死の枕辺には美しい黒髪が生前の姿のまま、打ち置かれていた。それは在俗のまま死んで行った美しい人を示して象徴的できへある。美しい人は人々の悲しみにつつまれながら、八月十五夜の満月のあとの暁の空に煙となって昇って行く。

紫の上は物語の女主人公らしい美しい終りを有つたのであった。美的意味でその生は完成を見せた。さまをこそ変えなかつたが、その終りの生活は仏の道を外れなかつた。素懐を果すことを許されないのはわが身の宿世の至らなさと想う反省心、源氏の深い寂寥を思いやるやさしさ、さかしらを慎む女らしい心づかい——これらに

見える紫の上の謙虚な順応態度は、内面的には、人間の宗教的・信仰的誠実心と、本質を等しくするものではなからうか。その切望していた、全く仏に随順帰依する生活を、彼女は美的外見のうちに事実上完遂したのだと私には思われる。

紫の上死後の御法の巻とこれに次ぐ幻の巻全巻は亡き紫の上に捧げられた哀傷のことで埋めつくされている。作者は源氏の悲嘆の形で、心身共にすぐれて美しかった紫の上を追悼している。あふれる涙を以って紫の上を讚美している。云いかえればそれは紫の上の生が完成したことを証かすものである。

## (二)

源氏には、紫の上が死の手に持ち去られた今こそ出家の機会が到来する。御法の巻の紫の上死の部分と、幻の巻の全巻は、紫の上を追慕すると共に一面では源氏の出離の望みを描く文字で埋っている。而かも彼は直ちに出家することなく、哀傷に感溺したかの如き一年を送る。何故であろう。作者は源氏に、愛妻を死の手に奪われた失意喪心の老い人として、挫折感に発する出家をさせる気がないのである。作者は明石の方に次の様に云わせている。

「いにしへの例などを聞き侍るにつけても、心におどろかれ、思ふよう違ふふしありて、世をいとふついでになるとか。それはなほわるき事とこそ。」(幻)

一時の感動又は悲嘆に心を衝き動かされたり、または世路に挫折してその興奮が出家の動機になるのはよくないというのである。作

者は明石の方の右の言葉を「いとめやすし(幻)」と肯定している。出家は人間に生れた者に与えられた特恵であろう。作者の考えでは、それは、沈静した平常心と冷徹した眼を以つて悠久を見透して、単一無難に発心する場合にだけ許されるのである。われわれはまた、出家生活のあり方について源氏自身の抱いていた理想があつたのを憶えている。紫の上の在世中であつたが、きびしい分離を源氏は未来の自身に課していた。

「一度家を出で給ひなば、仮にもこの世を顧むとは思ひ控てず。後の世には、同じ蓮の座をも分けむと、契り交し聞え給ひて、頼をかけ給ふ御中なれど、ここながらつとめ給はむ程は、同じ山なりとも峯を隔てて、あひ見奉らぬ住処に、かけ離れなむ事をのみ思ひ設け……」(御法)

「光る源氏」の生涯の最終の部分に作者は理想的出家を設定し、その表現はわざと暗示に止めたのだと私は理解するものである。

阿部秋生氏は「六条院の述懐」(東大教養学部人文科学紀要第三九輯)に於いて、幻の巻の源氏の述懐の言葉に注目し、

「この世につけては飽かず思ふべき事をさあるまじう、高き身には生れながら、また人より異に、口惜しき契にもありけるかな、と、思ふこと絶えず、世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの掟て給へる身なるべし。それを強いて知らぬ顔にながらふれば、かく今は夕近き末に、いみじき事のとちめを見つるに、宿世の程も、みづからの心の際も、残なく見はてて心安きに、今なむ露のほ

だしくなりたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目ならず人々の、今はとて行き別れむ程こそ、今一際心の乱れぬべけれ。」と、御法の巻の地の文

「いにしへより御身の有様思ひ続くるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなき程より、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を、心強く過して、つひに來し方行く末も例あらじと覺ゆる悲しさを見つるかな、今はこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行におもむきなむに、さはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心惑にては、願はむ道にも入り難くや、」とは、シチュエーションの差から來る小異を除けば、全く同一内容であることを指摘し、二度出て來ることは重複と見るより、六条院の胸中にわかまっていたものが、この様な形で溢れ出て來たのだと見ることも出來るといつて居られる。

この説にしたがつた上で、私は、源氏のこの感懐は、永い人生の責務を果した今、しみじみと自身の歩んで來た過去の人生を回想し、我が身は幼少より無常を知る為に仏が定めおかれた身の上だと思つていたのに、その果に紫の上の死に遭遇して、この様に心惑いをし、出家をするにもその様な沈静した心境になれそうにもないと訴えているのだと理解する。夕霧は父の困惑し切つた姿に「かくのみ思ひ紛れずは、御行にも心澄まし給はむこと難くや(幻)」と案じている。然し源氏に出家の意志があることは、動かない。私は、源氏が自身を指して「悲しく常なき世を思い知るべく仏などのすす

めたまへる身」(御法)といい、「世のはかなく憂きを知らずべく  
 仏などの掙て給へる身」(幻)と重ねて云うことで、作者が入念に無  
 常觀を直接法で打ち出して来た点に注目したい。源氏は早く上に見  
 た二つの述懐と似た言葉で発病以前の紫の上を相手に語っている。

「(a)自らは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出  
 でて、今の世のおぼえ有様、来し方に類少くなむありける。(b)され  
 どまた世にすぐれて、悲しきめを見る方も、人にはまさりけむか  
 し。先づは思ふ人にさまさま後れ、残りともまれる齡の末にも、飽か  
 ず悲しと思ふこと多く、あぢきなく然るまじき事につけても、あや  
 しく物思はしく、心にあかず覺ゆること添ひたる身にて過ぎぬれ  
 ば、(c)それにかへてや、思ひし程よりは、今までもながらふるなら  
 む、となむ思ひ知らるる。」(若菜下)

この三つの述懐を比較すると、若菜下の(a)は、御法、幻の述懐と  
 大した相違がないが、若菜下の(b)と(c)の部分と、御法・幻の述懐と  
 の間には質を異にする大差が見られる。若菜下の時点では、源氏は  
 我が身を幼少時から次々に肉親に死なれる不幸な身、思いを充たし  
 得ぬ歎きの添つた身と回顧しているだけであるが、御法・幻では、  
 仏が無常を悟らせる為に自分に悲運の道を辿らせたのだと受け取つ  
 ている。そして、自分は知りつつ仏の啓示を無視して、俗界になが  
 らえて来たのだと反省している。これは紫の上の死に遭つた後の  
 時点での受け止め方で過去を透視して、初めて云い得る言葉である  
 う。人は死ぬものだと源氏は紫の上の死によつて初めて知つたので  
 ある。今までに知つていたのとは全く違う深部感覚で、近々と人生

の本当の姿を見て、知つたのである。若菜下の源氏は(b)の不幸を代  
 償として支払っているから、(c)四十七才の今日まで自分は命を保ち  
 得たのだらうと云う。満足感と云えないまでも、現世的な一種の安  
 定感の上に居居つていたのであつた。それが根底から突き崩された  
 のが上の御法、幻の時点の述懐である。目前に「無常」を押しつけ  
 られた彼は虚を衝かれ、我を失つて動揺し、今までと人生觀の質が  
 變つた。世を思ひとつたのである。然しこの時点の彼は、出家を既  
 定の進路としてはいるのだが、実の所まだ動揺が止まらない。

彼はまた明石の方を相手に述懐している。

「年経ぬる人に後れて、心をさめむ方なく忘れ難きも、ただかか  
 る仲の悲しさのみにはあらず。幼き程よりおほし立てし有様、もろ  
 ともに老いぬる末の世に、うち棄てられて、わが身も人の身も思ひ  
 続けらるる悲しさの堪へ難きになむ(幻)」

愛妻が奪われたのが悲しいだけでなく、わが身についても紫の上  
 についても思い出が限りなく湧く悲しさが堪え難いという。無常觀  
 と愛執の念とが並行して彼の心を捉えている。彼の情念は、思い出  
 として一つ一つ具体的に現に存在するものに、ゆきぶられる。それ  
 を彼は敢えて振り切ろうとはしない。人間の自然感情を無価値、無  
 縁のものとして断ち切つてしまわない。源氏は涙がちの日を過す。  
 人に逢わず、風物につけて亡き紫の上を追慕しつつ、多くを女方で  
 過す(幻)。理性的なわり切り方をする男性のあり方一般とは別世  
 界にあつて、独得の無常觀、出離の心境が、源氏の内面に成つて行  
 く。年の暮に源氏は人々に形見分けをし、文反古を破らせる。最後



に、紫の上から須磨に送つて来た文殿に哥を書き添えて焚く——現世の愛、現世の思い出との袂別である。それは人間的な愛や悲しみを些かも損傷しない離脱、無常感と相即した人間の感情を象徴しているかの如くである。その年の六条院の御仏名は例年よりも手厚く管まれ、源氏は初めて人々の前に姿を現す。

「御かたち、昔の御光にもまた多く添ひてありがたくめでたく見え給ふ（幻）。」

かつて明石の方は源氏に

「おぼし立つほど鈍きように侍らんや、つひにすみはてさせ給ふ方、深う侍らむ（幻）」——出家を御決意なされる時に、もしも鈍い（決心がつきかねる）ようでごさりますならば、それが出家として結局最後まで住み通し（道心堅固で一生を過ごし）なされる点は深うごさりましたようか（大系本源氏物語頭註）

と言つた。今やその機が熟した。心境が整つたのである。間もなく新しい年が明けよう。源氏は来年正月の六条の院の年賀は例年よりも立派にと指図する。

「朔日の程のこと、常より異なるべくと掟てさせ給ふ。親王たち大臣の御引出物、品々の縁どもなど二なう思し設けてとぞ（幻）」

「岷江入楚」はこれに注して「院の拜礼今年ばかりなるべしとて用意あるなり」と云う。源氏物語の所謂第二部はここで終る。藤の裏葉の巻の結尾で源氏は太上天皇を贈られた。その栄光に匹敵する栄光を以て、作者は光る源氏の人生を完結した。ずっと後に宿木の巻に至って読者は源氏の出家が成就したことを知らされる。

「花鳥余情」は幻の巻について

「此巻にては正月より十二月まで月をかゝさず次第にのせたり余巻には未だあらざる筆法也六条院の悲歎の事日々月々にわすれもやらず紫の上をしたひ給ふ心をあらはせるなり」

と云つてゐる。幻の巻の性格を巧みに言い得ていると思う。同時に私は、この巻で源氏が、十二ヶ月の時間の間に作者の言葉で以つて言えば世を思ひとり、彼の独特の人間的内容を持つた無常観を完成して、出家を決意する点に注目した。

作者は、構想上、全源氏物語の中の源氏の生涯を描いた四十一巻の結尾の巻としての地位をこの巻に与え、しかも十分に所期の効果を収め得た。この巻で源氏の理想的人間としての生が完成するからである。そしてまた、四十一巻の色調をすこしも破らずに、「源氏の物語」全体の色調を、落ちつく所に落ちつかせたからである。